

吹雪峠②

- ① ガケから落ちたあやこに、おまわりさんは今までのことを聞きだしていました。「では君は、がけから落ち、何もかも忘れてしまったというのかね」「はい：私、何も思い出せません」「ふーん、それは困ったな」吹雪の日に峠から落ちて赤ちゃんと別れ別れになつたあやこは、自分の名前も赤ちゃんのこともすっかり忘れてしました。
- ② 「でも私、一二三日すれば思い出すかもしれません。それまで、ここにおいてください」「それがいいだろう」
- ③ 「これは君が着ていたコートだね。ここにあやこと書いてあるが、君はきっとあやこ」という名前だよ。それから財布があつて、五万円入っているよ」「まあ…」あやこは、何がなんだかわからなかつた。さて、こちらでは。
- ④ 「先生、あの人は名前も何もわからなくなつたんですって」「そうだ、困つたものだよ。でも金はあるから、四五日おいてやるといいよ」
- ⑤ そんなことがあつてから、五日ばかりが夢のように過ぎていきました。あやこは、とにかく東京へ行つてみることにしました。それは、着ていたコートが東京で作ったものだつたからです。あやこはおまわりさんに送られて駅へと向かい、村を後にしました。それから、あやこがどこへ行つてしまつたのか、どうしているのか、誰にもわかりませんでした。
- ⑥ やがて春がきて、雪がとけて、小川がさらさらと流れる頃になりました。
- ⑦ ある日のこと、天吉は、拾つた赤ちゃんのおもりをしていました。「天吉や…この子はうちの子にするんだから、拾つたなんて誰にも言うんじやないよ」「わかつたよ、誰にも言わないよ。ひとみちゃんいい子だね。おらの妹だよ。おらが子守唄をうたつてやるから、ねんねしな」
- ⑧ 天吉は子守唄をうたいながら、やがて村へとやつて来ました。すると、友達に出会いました。「あれつ、天吉。その子どうしたんだ?」村の子供たちが珍しがつて寄つてきました。天吉は、「うん、そのね、この子は…あのね、雪の日に…雪の日に…うーん、父ちゃんが町で買つてきたんだ」そこへ通りがかったのは、大山巡査でした。
- ⑨ 「おいおい、その子を買つてきたつて？その子はどここの子だ。お前のうちの子供じやないだろう」「この子はおらの妹だよ。ひとみというんだよ」天吉は本当のことを言いませんでした。果して…